三願共に宿善あり

第五席　疑晴れたら確になるか

一　南無阿彌陀佛の六字の謂れを聞く機は宿善の機でなければいかぬ、宿善の機でなければ法は聞えぬ、之は私がいふまでもなく、三帖目四帖目は宿善無宿善の御化導ばかり、宿善開發の機でなければ法を與へるなどまで云つてある。昨日も一寸云つて置いた一帖目の四通には平生業成、來迎不來迎の事が書いてある、家へ歸つて讀んで見ると解る、宿善の機でなければならんといふ事が書いてある。

一帖目の第四通、之は眞宗の一念發起、平生業成といふ事を自問自答してある。

疑晴れたら確になる

抑、親鸞聖人の一流にをいては、平生業成の儀にして、來迎をも執せられさふらはぬよし、うけたまはりおよびさふらふは、いかゞはんべるべきや……答へていはく。……おほよそ、當家には、一念發起平生業成と談じて、平生に、彌陀如來の本願の我等をたすけたまふことはりをきゝひらくことは、宿善の開發によるがゆゑなりとこゝろえてのちは、わがちからにてはなかりけり、佛智他力のさづけによりて、本願の由來を存知するものなり、とこゝろうるが、すなはち平生業成の儀なり。

たゞきくではない

阿彌陀さんの今助けてお呉れる事を聞くのは、たゞ聞える事は無い、宿善の開發によらねばいかん。南無の二字のお助けは墮ちる機お助け、阿彌陀佛の四字のお助けはたのむ機お助け、此二つを南無阿彌陀佛のお助けといふ。所が此六字のお助けに今あふのはどういふ機かといふと宿善の機でなければいかん。宿善の機とはどういふ機の事かあんた方よく聞くであらうが、普通教へる言葉は、後生大事の思ひ、所が後生大事の思ひの宿善には三願の違ひがある。十九の願にも宿善があり、二十の願にも宿善があり、第十八の願にも宿善がある、此の第十八願の後生大事の思ひは十九の願や二十の願の後生大事の思ひと少し違ふ。それではどういふものを第十八願の宿善といふかといふと、之は私が申す迄もなく、此の總會所等は一年中説教があつて聞く事は仰山聞かれる、聞いて〳〵聞きぬいた頂上どういふ事になるか、法門から話をすると面倒いから、實地に當てゝ話をする。

教持の宿善

聞きぬいた曉、信心の道理も解つた、御本願の謂れも解るだらう、そんな事の解る間が、教持の宿善、教を持つの宿善といふ、之は遍照の光明の御養育にあづかる間で、これすら長い間かゝらねばならぬ。命は法の寶である長い命がないと本眞の所へ行かれん。短い命では駄目、大略そこまでゞ一代はてゝしまふ人が多い。こゝに居る人は仰山あるが第十八願迄の聞手はまことに少い。あんた方、自分等の經歷で解る事だが、一番初めに御信心貫ひにかゝるだらう。後生といふ

事はかういふ事、助け給へはかういふ事、だん〳〵聞くうちに譯がわかる、一番初めは其の譯の解つたのを信心にする。譯が解つたのでこれで疑晴れたで大丈夫、彌陀頼んだで大丈夫と一返はなるだらう。それで御淨土へ參つたつもりになつてしまふ。こゝには大分聽聞した人があるから自分の經歷から解るであらうが眞宗では是は信心にせん。疑ひ晴れた、信じた、大丈夫のお助けに夜明けした、聞いて覺えて譯のわかつた、自分のなり心を役に立てるから、之は十九願の信心、所が、今日の畫話したやうに、參らせてお呉れるに間違ひない大丈夫の御慈悲と解つて安心はしたが、後生といふことを向ふに置かん、たつた今に引寄せ、今夜でも出かけて行かんならんが、魂よいか、かうやると疑晴れた、信じた、夜明けした、御信心貰つた、參らせて貰ふに間違ひないと夜明けした、そこには何にも疑ひは無いが、後生となつたら何があるか、たつた今でもとなるとまつくらがり、これからが宿善の初まり、此の機の目についたのが宿善の初まり。今迄は

宿善の初まり

そんな事は目につかぬ、愈〳〵信心も貰ひ疑ひも晴れたが、萬劫にも億劫にも取返しのつかん後生だが、魂どうぢや、まつくらがり。人の前ではいへぬ事ぢやが、何にも無い、此の機の目についたのが宿善の初まり、之が後生大事の思ひ。

自力の機と自性の機

二　所が之は學理上の話をした所が解らんが、そこには二つの物が寄つて一つの物が出來て居る。それは何かといふと、凡夫自力の機と、凡夫自性の機、此の二つが喧嘩する。明かで無い確でない眞闇がりと、明かになりたいしつかりしたい、確になりたいが喧嘩する、明かでない眞闇がりは凡夫自性の墮ちる機、明かになりたい確かりなりたいは凡夫自力の機、之れが喧嘩をする所が後生大事の思ひ、明けても暮れてもこれが目について胸につかへて困る所が宿善の機。其の宿善の機に六字が聞える。たゞ疑晴れた、夜明けした、信じた、そんな所に聞いても何にもならん、疑晴れても居る、信じても居る、參らせてお呉れるに間違ひないと夜明けもして居る、どこに不足も無いが、後生だ、たつた今でも出かけて行か

間に合ふものが一つもない

んならんと後生をたつた今に引寄せて見ると何にもありやせん、が出て來る。そこに喧嘩が始まるだらう。こゝはどういふものか知らん、此の儘ぢやらうかどうなるだらうか、確になれんと確になりたいが捻ぢあつて、困つて〳〵困りぬいて居る頂上が宿善。之は段々聽聞して居ると必ず出る筈のもの、こゝまで來ねば自力を捨てる一念といふ事は解るもので無い。こゝまで行くと、疑晴れたと思つた思ひも、信じたと思つた思ひも、間違ひないと思つた思ひも、大丈夫と思つた思ひも、愈今夜でも出かけて行かんならんとなると、何にも間にあふものは一つも無い。之は私がいはなくても少し力を入れた人ならきつと解る。長い間聞いて、疑晴れる稽古や、信ずる稽古や、彌陀たのむ稽古をやつて〳〵やりぬいた擧句、こゝに出て來た、頂いたら確になるだらう、貰つたら大丈夫となるだらう、と煩悶し苦しむ所が宿善、此の機に六字のお助けが聞える、外の機には聞こえんぞ。宿善といふ機は信心ぢや無い、疑晴れるぢや無い、夜明けするぢや無いぞ、八十通を讀んで見い、後生助けたまへとはあるが、後生に疑晴るゝとは、一箇所も無い。宿善開發の機は後生に困る、信心には困らんぞ、信心に困る間は樂だ、疑ひも晴れた、信心も貰つた、彌陀もたのんだ、安心もした、併したつた今でも出かけて行かんならんとなつて、何やら、アヽエーナーとはどうも心に云つて呉れん、これだけが目につき出さう。譯や理窟には困らん、譯や理窟や道理は解つても後生に困る。

アヽエーナーと云はぬ

三　私がいつも話をすることだが、こゝは同行は却々かくして出さぬ、これを出すと同行の値打が下る。大抵、疑も晴れて居る、何時命終つても參らせて下さると安心もし落着いても居るが、どこが惡いか、一向喜ばれませんといふ、あれは嘘、喜ばれませんぢや無い、外に尋ねたい事はあるが、そこはいふにいはれん所。却々白狀せんが、そこを白狀せんといかん。宿善の機はそこを白狀する。御同行が間違うてはいかんで、私が尋ねやうを敎へて置く。

出すと値打が下がる

或る女同行の領解

四　一昨年であつたと思ふ、五十餘りの女の人が座敷に來て、二三人の男の同行もあつたが、「お尋ね申します」、「どういふ事がきゝたいナ」、「私はもう外におきゝ申したい事は無い」、「こゝらに人が居つても恥かしい事はない云ひなさい、今の恥を恐れて萬劫の恥になつてはいかん、遠慮はない、いひなさい」其の尋ねはかういふ尋ね、まことに有難い。「外でもございません、私は子供の時から長い間聽聞して聽聞しぬいて、今日では阿彌陀さんの御本願の謂れもよく解つて居る、參らせて下さる御本願には露塵程の疑ひも無い、安心もし落着いて居る、何時命が終つても大丈夫と喜ばせて貰つて居る」、「そんならそれでよからう、何がいかん、何が不審であるか」、「それだけはよい、それはよいが外に不審がある」、「さうか、どういふ不審ぢやな」、「外でもございません、安心して念佛して居るが、たつた今でも此の娑婆を立つて行かんならんと思ふと、私の胸の中が、ヱーナ、大丈夫ぢやナ、とどうも手に物を握つたやうに確にない」かういふのだ。「そこでお尋ね申したいは外でもないが、私の胸の中に、阿彌陀樣の助けてお呉れる間違ひなさらんといふお助けのお手許の丈夫な事に疑ひさへ晴れて居つたならば、私の胸の中は、今となつてつかまへ所の無いなりで宜しいか」。うまいね、「ア、大丈夫ぢやなと、こつちもならねばお助けにあへませんか」、うまい事を云つたものではないか。大抵何となうどことなうよりいはれんところを其の人ははつきりいつたのだ。

此儘ちやらうか

五　之は私がどこへ行つても敎へる事だ。これが後生大事の思ひ、此奴一つが胸にはさまつて居る。人の事とは聞いて居られんだらう、誰でも詮じ詰つたらかうなるにきまつて居る。此の機の事を宿善の機といふ、こゝが煩悶する所だらう。此のまゝぢやらうか、どうかなるぢやらうか、凡夫ぢやで、煩惱にまなこさへられてと仰しやる、こんなものぢやらうナンマンダブツ、といふ所だ。大概、煩惱のあるものは確になれるものでない、こつちはどうもなれん、墮ちるより仕樣が

無い、寝て居れ〳〵といふ所ぢやらう。これで皆よい加減に地獄へ行く、はつきり聞けよ。

これはお助けが間違つて居る事に注意しなければならぬ。お助けが違ふ、お助の品物が違つたからさうなつた。昨日から私が云つたやうに、お助けをいふと直に阿彌陀さんが御淨土に連れて行く事と思ふから間違ふ、眞宗のはさういふ教へで無い、そんな事をやるから、後生となつて今行かんならんとなると、向ふさんの御助けは疑はんが、こつちの胸がどうも手に物を握つたやうに行かんがどうしやう、といふ事が起つて來るにきまつて居る。御信心は出來たが、後生となつてサア今行かんならんといふと此の胸が、何にもつかむ所が無いが、此のまゝぢやらうか、ナンマンダブツといふ所だらう。こゝで必ず行き詰らねばならん筈のもの。お助けの模樣が違ふといふ事を知らんからさうなる。宿善開發の機でなければ六字のお助けは解らんといふのはさういふ譯。

一代の間聞けば

六　お同行はあんた方今迄やつて來た經路でわかるだらう。御信心貫ひに骨折り、地獄行きの此の儘助けてお呉れる、直に夜明けして墮ちん積りになり、もう蓮臺の上に坐つた積りになる。それから段々聽聞しつゞけて來ると行き詰つて來る。これが宿善。聽聞の仕樣が惡いと、スラ〳〵ツと行くやうに思ふ、これは大間違ひ、これで一代の間骨折らんならん。

私とお六字と差向ひ

七　さうするとそこはどうなる、私と南無阿彌陀佛の六字の勅命と差向ひになる。阿彌陀さんの本願われにまかせよ、われたのめといふ所ぢや。そなたの方で、間違ひない疑晴れたと思ふた思ひ、參らせてお呉れるに間違ひないと夜明けしたと思ふた思ひも、此の彌陀には更に用事が無い。用事が無いでは解るまいが、更に關係が無い。思はふが思ふまいが俺には更に關係はない。然らばどういふ事が御本願の約束か、俺の本願六字の約束は疑晴れたと思ふた機や、信じたと思ふた機には用事はない。俺の本願に用事のあるのは、後生となつて、只今でも出

かけて行かんならんと思つたら行場が無い、其の機受持つためにたてた、われにまかせよ、われたのめ、六字はそこに出て來る。俺の本願六字の約束は、疑晴れたと思ふ機や信じたと思ふた機や、墮ちん機、參る機には用事は無い。後生と踏み出したら行場なし、未來となつたら方角有たす、其の機引受けるためにたてた。死んでぢや無い、今ぢやぞ、今となつたら何もない困りはてた、其の機が大事々々の六字の正客、そこに我にまかせ我たのめが出て來た。六字の勅命は宿善の機でなければ聞こえんといふのはさういふ譯。疑ひ晴れた、信じた今違ひないと落着いた、あの機には南無阿彌陀佛の六字は關係ない疑晴れたら勝手に行け、參れるとなつたら勝手に行け、俺の本願の正客は、後生となつたら行場有たず、未來となつたら方角なしの、其の機受持つためにたてた。それで樂だらう、吾々の困つた所を引受ける本願だから有難からう。

私の胸は確に

八　そこで今の尋ねぢや、向ふさんに疑ひはない助けて下さる本願に露塵程の疑ひはないが、サアとなつたら此の胸がはつきりしませんが、此の胸は確になれんなりでよいか、大丈夫とならにやいけませんか、はつきりいひたからう。そこで阿彌陀さんは、墮ちんつもりなら勝手にせよ。俺の本願の約束は、後生となつたら行場持たず確になれん其の機こそ俺が受持つ、われにまかせわれたのめといふ勅命は外に聞いたら駄目、足の痛いのに頭に膏藥を貼つては駄目、頭痛がするのに足に頭痛膏を貼つても何にもならぬ。後生一つに困り果てた所に、我にまかせわれたのめといふ勅命を聞かにやならぬ。それで無いと無駄骨折り。

なれんでもよいか

どうしても墮ちさうだ

九　今度は反對に向きをかへて、今迄は、疑ひ晴れてお助け、御本願が丈夫ぢやでお助け、お慈悲が丈夫で墮ちんと助かる積りの、參る積りの積りをして居りました。愈〻後生となつたら、積りぐるめ外れましたと行け。疑ひ晴れたと思ふた思ひも、信じたと思ふた思ひも大丈夫と思ふた思ひも、サアとなつたら何にもならん、間にあふものは何があるか、たゞ方角なしの眞闇がり、參れ相にないと墮

ち相な、これより外はございません。それを引受ける親が待ちかねて居る、われにまかせわれたのめ、命終つてお淨土で無い、命終らんたつた今、參る事の心配は俺が受持つ、墮ちん事の心配も俺が引受ける、それからさきは守りづめに護つて離れんといふ勅命を、そこに聞かせて貰ふから、大丈夫ぢやな、といふ安心が出て來る。